日立北大ラボ・吉野さんが講演
2100年の「北海道の景色」を語る



2100年の北海道について話す講師の吉野さん

北海道倶楽部主催の講演会が10月21日、東京・永田町の「永田町ほっかいどうスクエア」で開かれ、日立北大ラボの吉野正則さん（北大特任教授）が「北海道を考える：2100年の景色」と題して講演した。

吉野さんは数多くのデータを示しながら、道内の「未来の景色」を語った。倶楽部講演会の開催は今年2回目。

講演では2100年8月の札幌の最高気温が40・5度にも上昇との予測を示した上で、「環境に適応した新たな北海道を」と強調。例えば水産業分野では、タコ、カキ、ホタテ貝、エビなど新しい陸上養殖の可能性を指摘した。

農業では、現在ワイナリー数が国内3位の北海道が「ブドウ、ワインの生産地になっていく」とし、「アグリツーリズムを展開することで、道内経済の振興に貢献できる」などと話した。

岩見沢市などで進む「スマート農業」にも言及。すでに労働力不足対策の決め手として、無人トラクターが導入されているが、「技術は除雪にも応用可能」とアイデアを披露した。

一方、北海道が直面する大きな壁も。日本の人口は2100年には半減し4970万人になると予測。出生率が全国平均1・34を下回る北海道人は「絶滅危惧種になる」とし、その克服を訴えた。また、「道内は大学進学率など男女差が大きい」とも述べた。ちなみに全国で最も男女平等が進んでいるのは鳥取県。

吉野さんはオホーツク管内佐呂間町出身で、日立製作所基礎研究センターのシニアプロジェクトマネジャー。北大の産学・地域創発本部長も務める。

日立北大ラボは16年、日立基礎研究センターの外部ラボとして北大に設立された。少子高齢化、食、農業の新産業創出など道内の課題解決を目指している。